

● 報 広

おいらせ

Special
Edition

秋祭り

—豊作豊漁を神に祈る—

- 02 みんなに教えたいくなるこの人 —林美咲さん—
- 20 Oirase Topics まちの話題
- 22 八戸圏域定住自立圏構想を締結
- 28 Monthly Oirase Infomation
- 32 悩まず相談してください —各種相談の窓口—
- 34 ZoomUp 頑張るおいらせ人にインタビュー
- 36 家族のきずな —小向尊さん・こころさん—

Public
Relations
November
2009
No.57

11

CONTENTS
目次

- 02 みんなに教えたいこの人
ー林美咲さんー
- 03 特集
秋祭り
- 20 Oirase Topics まちの話題
- 22 八戸圏域定住自立圏構想を締結
- 24 公民館講座
- 27 国民年金
- 28 Monthly Oirase Information
- 31 戸籍の窓
- 32 悩まず相談してください
ー各種相談の窓口ー
- 34 ZoomUp ー下田スワンクラブー
- 36 家族のきずな
ー小向尊さん・こころさんー

Special
Edition

秋祭り

ー豊作豊漁を神に祈るー

おいらせの秋は祭り一色に彩られる。
遠い昔も、そして今も。
先人たちがつくりあげた祭りの歴史は、
子どもや孫たちに綿々と受け継がれる。
神への祈りと感謝を込めた祭りは、
地域の人々の強いつながりを生み出す。



百石まつり前夜祭は9月18日、中央公園で開かれた。
まつりばやし共演会でちようちんを手に、前を見据える
北組の有澤司さん（百石小5年）。



表紙の写真●百石まつりにお
稚児役として参加した渡辺愛
子ちゃん＝（5つ）木崎＝。
真剣な表情で化粧をしてもら
う

例大祭に山車が付くというものである。その歴史的な背景は、現在も「附祭」という言葉が残っていることから想像できる。

祭りにかわり半世紀以上
祭りを愛する古老の熱い思い

北向敬夫さん（上新町（七））は、若宮八幡宮の神事に五十年以上かかわってきた。百石まつりの由来を知る、数少ない古老の一人だ。

北向さんは「百石まつりは陸の神、海の神への祈りが込められた祭りなんです」と話す。昔からこの地域にとって、農産物や海産物は生活になくてはならないものだった。豊年豊漁を神に祈願する気持ちを大切にしているのが、百石まつりの精神だ。

百石まつりは、北向さんにとって忙しい日々の始まりでもある。神へのお供え物の準備などを、手際よく行う。「昔からサケ、米、酒、野菜など、お供えるものは決まっているんですよ」と笑顔で話す。

北向さんは最近、病を患い病院へ通う日々を過ごしている。それでも半世紀以上もかかわってきた百石まつりには「何としても出なければ」と考え、通院スケジュールを調整したという。物静かな古老の、祭りへの熱い思いを垣間見た。

1 太平洋を見下ろす小高い丘の上にひっそりとたたずむ土鼻神社（明神下）
2 若宮八幡宮の神事に半世紀余りかかわってきた北向敬夫さん。農産物や海産物など、お供え物の準備を丁寧に行う



肴町山車組、大工町山車組のルーツである和合組の記念写真。大正時代のもので推測される [提供／肴町町内会]

歴史をひもとく

File 1 百石まつり

【9月第3土・日・月開催】

百石まつりは明治時代から引き継がれる、長い伝統を持つ祭りだ。陸の神、海の神への祈りと感謝を込めて、現在も古式ゆかしい伝統が守られる。古くから祭りの歴史を知る古老は、祭りへの思いを熱く語った。



若宮八幡宮と土鼻神社を行き来するみこし

祈りと感謝を込めた祭りは
百三十年の長い伝統を持つ

町分庁舎南側にある若宮八幡宮は、杉の木に囲まれひっそりと建つ神社だ。毎年二月にはえんぶり、九月には例大祭が行われる。

現在の百石まつりは、若宮八幡宮の例大祭だった。今からおよそ百三十年前の明治十三年、若宮八幡宮のみこしなどを、四ほど北東にある土鼻神社（明神下）へ運んだ。みこしは土鼻神社で二泊し、若宮八幡宮へと戻る。これが百石まつりの由来と伝えられている。

明治二十二年には根岸の大神楽や太鼓など、本格的な行列が行われるようになる。豊作を祈願する豊年旗、豊漁に感謝する豊漁旗なども加わり、祭りはいつそうにぎやかなものになった。明治三十八年には、日露戦争の勝利を祝ったといわれる。山車組は北組、南組が明治二十二年に参加。これ以降、いくつもの山車組が参加し、祭りを盛り上げている。なお、百石まつりは若宮八幡宮





仮装した女たちの乗ったリヤカーを、男たちが引く。昭和 28 年ごろの写真と思われる。後列左端の女性は岩崎さん [提供／岩崎静江]

当時行われている祭りは、明治時代から古く続く百石まつりくらいだった。三田地区からも百石まつりへ行く人はいた。しかし、どうしても行くことができない人も多かった。また、戦後の貧しい時代、ほかの地域の祭りに足を向けることは、現在とは比較にならないほど負担だったと岩崎さんは振り返る。

停車場で祭りが行われるようになり、子どもたちは目を輝かせながら祭りを楽しんだ。大人たちも、普段の仕事を忘れ、祭りに没頭した。仮装用の衣装を作るため、若い母親たちは夜遅くまで集まって作業をした。岩崎さんは「疲れても何ともありませんでした。子どもたちを楽しませたいと思って、お母さんたちはみんな笑顔だったんですよ」と当時を思い出しながら話している。

岩崎さんは何枚もの古い写真を取り出し、一枚一枚じっくりと見つめる。若かりしころの彼女の姿もある。今はすでに亡くなってしまった人も大勢いる。

現在の祭りからは想像もつかないような、小さなリヤカーから始まった下田まつり。「最近の山車は大きくて、立派になりましたね」と話す岩崎さん。今でも山車に乗る生き人形の姿を見ると、懐かしい気持ちでいっぱいになるという。

昭和

三田北組（昭和 27 年）

三田中組（昭和 27 年）

三田南組（昭和 27 年）

連合青年団（昭和 58 年）

三本木（昭和 61 年）

下田まつりは昭和 27 年に始まった「てしゃばの祭り」。昭和 30 年に改名した三田祭りが発展したものと伝えられている。

■参考文献／「下田まつり」生き人形の生い立ちと類似事例（櫻庭俊美）

平成

中止（平成 16 年）

中止（平成 17 年）

間木（平成 17 年）

Voice

岩崎静江さん
いわさき・しずえ (80)

祭りが始まったころは、戦後で物が無い時代でした。若い母親たちは祭りの衣装をつくるため、毎晩遅くまで集まったものです。子どもたちのために、みんなで力を合わせましたんですよ。



1 人々は装飾したリヤカーを引きながら練り歩く。昭和 30 年以前のものである（提供／岩崎静江） 2 祭りで最初に出場した生き人形は、みそ踏みの仮装をしたといわれている。三田南組のはんてんには、その様子がくっきりと描かれている

仮装行列でもしょうか： 下田まつりの山車はリヤカー

J R 下田駅周辺は、三田と呼ばれる地域だ。下田まつりは毎年九月、駅前を主会場として盛大に行われる。参加するみこしや山車は、伏見稲荷神社から駅前広場を通り、奥入瀬川近くまで練り歩く。一、二キロの短い道のりだが、沿道には多くの客が座り、行列を眺める。初日のお通り、二日目のお還りと、二日間にあたる祭りである。

戦後の復興が少しずつ進んでいた昭和二十六年、三田青年会の有志らは神社の御縁日に集まりながら、地域を盛り上げるため「仮装行列でもしょうか」と話し合った。翌年には生花などで飾ったリヤカーに、思い思いに着飾った人が乗り、町内を練り歩いた。小さな集落の祭りだったが、人々の大きな楽しみだった。当時下田駅前や三田周辺は「停車場」と呼ばれていたため、この祭りは「てしゃばの祭り」と名付けられた。

二十九年ころには伏見稲荷神社も、このてしゃばの祭りに加わった。そして翌年、祭りは「三田祭り」と改名する。馬車を使って本格的に山車を作り始めたのも、このころと考えられている。最初に山車を参加させたのは、三田地区の北組、中組、

下田駅周辺は、かつて「停車場」と呼ばれた。戦後の復興が少しずつ感じられた時代、停車場の人々は子どもたちの楽しみや地域を盛り上げるため、祭りを立ち上げた。これが下田まつりの始まりである。半世紀前に生き人形を務めた老婦人は、昨日のこのように若き時代を思い出す。

File
2

下田まつり

【9月第4土・日開催】

戦後で娯楽も物も少ない時代 母たちは笑顔で祭りの準備

岩崎静江さん（80）三田は、この祭りが始まった時代から、生き人形を務めた経験を持つ。当時の写真を見ながら懐かしそうに話す。

「戦後は娯楽も物も少ない、貧しい時代でした。子どもたちに楽しんでもらえる祭りの開催を、本当に心待ちにしていたんですよ。」



山車作りの 伝統を引き継ぐ

大工町は大正時代から百石まつりに参加している、歴史の長い山車組だ。以来山車の自作にこだわり続けている。決して大きいわけではない山車だが、陸の神、海の神への思いが込められる。自作の山車にこだわり続けた大工町の努力と汗の結晶だ。

陸と海の神に祈りと感謝
こだわりを貫く山車作り

大工町は大正時代の和合組をルーツに持つ、とても歴史のある山車組だ。明治時代から参加した北組、南組に次いで、三番目に古い山車組といわれている。

現在、百石まつりには十一台の山車が参加している。そのうち自作の山車は三台。大工町も山車の自作にこだわり続けている。リヤカーや馬車で参加していた昔も、華やかな山車で参加している現在でも、その精神は引き継がれている。

製作の中心的役割を担うのは、山車作りに四十年余りかわり続ける村杉徳孝さん（六七）大工町Ⅱ。今年の山車は、古くから日本に伝わるおとぎ話をテーマにしたものだ。金太郎や桃太郎、浦島太郎など、絵本に出てくる昔話の主人公たちの人形が、山車を華やかに飾っている。村杉さんは精密な図面を何度も手直ししながら、山車製作の構想を練り続けてきた。もともと百石まつりの山車は、陸と海の神への豊作豊漁の祈りを込め、それにちなんだ装飾をするものだったという村杉さん。「神への感謝を山車の人形に込めることで、百石まつりらしさが出てくるんです」と言い切る。大工町の山

ような気迫で追い払うことを願うものだ。そのため、毎年欠かすことなく根岸不動尊へのお参りを行う。

儀式は厳粛に執り行われる。大工町の一行は神主の祈りに耳を澄ませながら、手を合わせる。最後にお払いを受け、四十分余りに及ぶ儀式は終わった。

「神への祈りや感謝は、祭りには絶対に欠かすことはできない」と話す村杉さん。大工町は八十年以上の長い間、この精神を次の世代へ引き継いできた。同行した若い二人も、その伝統の重さを胸に刻んだ。

若者たちは門付けで
地域の大きな支えを実感する
山車運行が始まってから、若いメ

1大工町山車組は毎年、根岸不動尊でお払いをしてもらう。左から村杉徳孝さん、三村俊介さん、三村伸明さん 2山車の図面を描く村杉さん。陸と海の神に感謝する気持ちを込めた図面は、山車製作に欠かせない 3大工町山車組の笛役を務める木村まどかさん＝（22）大工町Ⅱ。小学生のころから祭りにかわって語ってきた木村さんは、子どもたちにお囃子を指導する役目も担う 4大工町の山車は完全自作。今年の山車はおとぎ話をモチーフに、陸と海の神への感謝の気持ちを込めたもの。日本の昔話を家庭で語ってほしいという願いも込めている。中央の祠には不動尊が見えている 5門付けにいただくお金は、山車運行の重要な財源になる。笑顔でお金を受け取る橋本愛さん（左）。深々と頭を下げて感謝する鈴木祐幸さん（右）

車はほかの山車組と比べ、決して大型ではない。しかしその装飾は、海や山のことを強く意識している。八月中旬から一カ月余り、若者たちも一緒に夜遅くまで山車作りに汗を流し続けた。祭りが直前に迫るころ、無事に山車は出来上がり、華やかな姿を現した。

神への祈りと感謝は欠かせない
伝統の重さを胸に刻む後継者

百石まつり当日、大工町の山車製作関係者は朝早くから山車小屋に集まり、村杉さんを中心にこの日の流れを綿密に打ち合わせする。祭りは午後から始まるが、午前中のうちに神社や屯所など、祭り期間中にお世話になるところへ、感謝のお酒を届けなければならない。外回りは村杉さんのほか、三村伸明さん（四九）、三村俊介さん（四〇）が同行する。

一行は最初に若宮八幡宮、土鼻神社へお参りする。この二つの神社は百石まつりと非常にかかわりが深い神社で、どの山車組もお参りする。

さらに大工町山車組は、根岸地区にある根岸不動尊へのお参りも欠かせない。古くから大工町の山車は、お不動様を中心に鎮座させている。これは世の中に降りかかるさまざまな災いを、お不動様のにらみつける

ンパーたちには重要な役目が待っている。地域のさまざまな人から寄付金を募る「門付け」だ。大工町は若者を中心に六つの班を編成し、担当地区を割り当てた。それぞれの班員は地図を確認すると、いつせいに山車小屋を後にする。

鈴木祐幸さん（二七）は、子どものころから山車組に加わり、門付けにも慣れている。同行するのは堀切川地区から参加する橋本愛さん（一六）。門付けへ行くのは今回で二回目だ。

多くの山車組にとって門付けで得る収入は、山車運行の重要な財源になっている。地域の温かい気持ち、祭りへの愛情を受け取る若い二人。鈴木さんは「本当にありがたいことです」とにつこりは笑んだ。



1



2



3

1娘の奈菜さんの顔に化粧を施す母の妙子さん。2七福神の一人、弁才天の役を演じた奈菜さん。山車の装飾に負けないくらい、美しい姿になった。3事務局長を務める中村清一さん。子どもたちの夢をかなえたいと、20年以上山車作りにかかわってきた

藤ヶ森の山車は、軽い発泡スチロールなどで作られた人形を乗せる構造になっている。しかし下田まつりは生き人形、つまり実際の人間を乗せることになる。土台をしっかりさせるために、改造が必要だった。百石まつりと下田まつりの開催時期は一週間の違いしかない。実質四、五日で山車の改造作業は行われた。毎晩町内の若者が繰出で、深夜まで

生き人形を乗せるため 四、五日の短期間で山車を改造

わけ、祭りへの参加を願って話し合いを重ねた。そして昭和六十一年、百石まつりに参加している藤ヶ森町内会から山車を借り、ついに下田まつりへの参加を実現させた。

残って作業を続けた。中村さんは昨日のことのように「あのときは自分たちも若かった。一番勢いのあつたころですよ」と、笑いながら当時の様子を話す。

藤ヶ森の山車を借りるようになって五年目の平成三年「三本木は藤ヶ森から山車の台車を譲り受けた。このことは三本木の人人々に大きな喜びを与えた。『自分たちの山車を持つようになるのだ』と」。

以来二十年以上、三本木は地域の熱い思いを集めて、山車の自作を続けている。

かつて生き人形を務めた母と 今年生き人形を務めた娘

今年、三本木は山車のテーマを「七

福神・おいらせ港まつり」と決め、山車を製作してきた。その意図を「来年新しい百石漁港ができますよね。その完成を願う意味も込めているんですよ」と説明する。

生き人形は七福神をイメージして乗せる。その中で唯一の女性は、下田中学校三年の八重垣奈菜さん（一五）だ。八重垣さんらは林過ぎの祭り開始に間に合うよう、十時には三本木集会所に集まり、化粧や衣装替えをする。

八重垣さんのみずみずしい肌には化粧を施す母親の妙子さん（四三）。みるみるうちに真っ白に化粧された自分の顔を鏡に写し「お母さん、ちよつと化粧濃過ぎない」と話す娘。「まだまだ足りないくらいだよ」と構わぬ様子の母。母子の仲むつまじい姿

囲気が、集会所を優しく包む。一時間ほどで奈菜さんの化粧と衣装替えは終わった。自分の姿を鏡に写して驚く奈菜さん。「一緒に集まった友人たちも笑いながらその変わりように驚いている。山車に乗り込み、ポーズをとった奈菜さんは、あでやかな本物の人形のようにも見えてくる。妙子さんは山車に乗った生き人形をいとおそうに見つめる。十年ほど前、妙子さんも生き人形として山車に乗った経験を持つ。来年高考生になる奈菜さんは、もしかしたら部活動や勉強などで忙しくなり、祭りへ参加することが難しくなるかもしれない。『最初で最後の生き人形かもしれない。本当にかわいい生き人形になりましたね』と、母は娘に優しいまなざしを向けた。



山車の細かい部分まで丹念に色を塗る。左から馬場義則さん、斉藤久さん

母から娘へ 伝える生き人形

青森県南地方最後の秋祭りで知られる下田まつり。その大きな特徴は、「生き人形」だ。かつてきらびやかな生き人形を演じた母親は、愛する娘の生き人形姿をいとおしそうに見つめる。

祭りで太鼓をたたきたい 子どもの夢をかなえるために

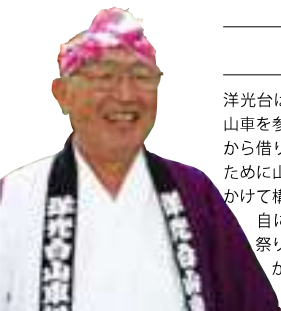
J R 東北本線下田駅の西側にある三本木地区は、百世帯余りの集落だ。下田まつりの時期が近づくと、子どもたちの元気のよいおはやしの音色が響き渡る。

三本木実行委員会の事務局長を務める中村清一さん（五五）は山車作りに汗を流しながら「今年のまつりばやし競演会は優勝を狙えるよ」と、子どもたちを見つめる。

かつて、下田まつりは三田祭りと呼ばれ、三田地区の人々が主流の祭りだった。中村さんが子どものころ、三本木に住む子どもたちは三田の山車組に参加させてもらっていた。しかし、当時は子どもの数が今と比べて多かった時代。三田地区の子どもたちが優先的に山車の上で太鼓をたたいた。中村さんは「（わたしも）太鼓をたたきたかったけれど、どうとうできませんでしたね」と、懐かしそうに当時を振り返る。

彼らは大人になり、親になっていく。「三本木の子どもたちに太鼓をたたき喜びを知ってもらいたい」、「祭りに参加して、子どもに夢を与えたい」と考えるのは、自然の成り行きだった。

三本木の大人たちは互いに力を合



前田薫さん

Maeda Kaoru (66)

洋光台は平成 14 年から百石まつりに山車を参加させました。山車は八戸市から借りています。地域の結束を高めるために山車を出したいと、長い時間をかけて構想を練りました。洋光台が独自に行う夜間の町内山車運行は、祭りに足を運ぶのが難しい高齢者から大変好評です。



洋光台 - Yakodai -

許可番号 876 南総里見八犬伝



思い

百石まつりに参加する 11 台の山車、
下田まつりに参加する 4 台の山車、
それぞれの山車組代表者が、
秋祭りへの熱い思いを語った。



小笠原和男さん

Ogasawara Kazuo (49)

南組は明治 22 年から百石まつりに山車を参加させている、大変歴史のある山車組です。昔は山車を自作していましたが、今は八戸市から借りています。長い歴史の中で、人手不足などのために参加を中断しそうになったこともあります。世帯数は少ないですが、みんなで力を合わせ、伝統を引き継いでいきます。



南組 - Minamigumi -

許可番号 875 南部師行出陣・南部騎馬軍団



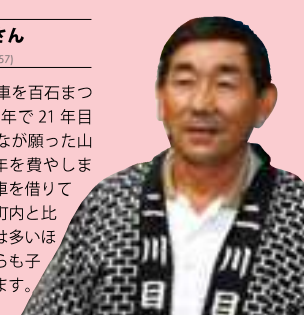
二川目 - Futakawame -

許可番号 879

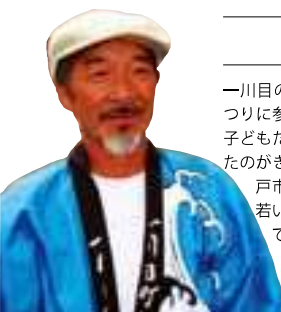
吉田勝則さん

Yoshida Katsunori (57)

二川目は平成元年から山車を百石まつりに参加させました。今年で 21 年目を迎えます。地域のみんが願った山車運行は、構想から 10 年を費やしました。今は八戸市から山車を借りています。二川目はほかの町内と比べ、子どもや若い人の数は多いほうだと思っています。これからも子どもたちと一緒に頑張ります。



酒吞童子



笹川和廣さん

Sasakawa Kazuhiro (56)

一川目の山車は昭和 49 年から百石まつりに参加しました。地域の青年団が子どもたちに夢を与えたいと思い始めたのがきっかけです。現在、山車は八戸市から借りています。子どもや若い夫婦がたくさん参加してくれて、とても心強いです。



一川目 - Hitokawame -

許可番号 874 猛将清正

一川目町内会は早くし助成金を活用し、祭り用衣装を購入しました。



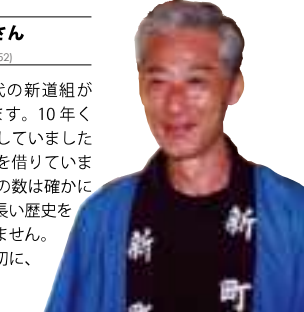
新町 - Shincho -

許可番号 878

小向毅志さん

Komukai Tsuyoshi (52)

新町の山車は、大正時代の新道組がルーツだと言われています。10 年くらい前までは山車を自作していましたが、今は五戸町から山車を借りています。昔と比べて、子どもの数は確かに少なくなりました。でも長い歴史を絶やすことは絶対にできません。町内のみんがの思いを大切に、これからも頑張ります。



長篠の合戦



馬場喜代治さん

Baba Kiyoji (80)

大工町は大正時代の和合組から流れをくんでいる山車組です。以来長い間、山車は地域の人々の手による自作にこだわってきました。大工町に住んでいる人だけでなく、大工町出身者たちも祭りに参加してくれます。これからは先人から受け継いだ伝統を、子どもや孫たちに継いでほしいと強く願っています。



大工町 - Daikumachi -

許可番号 900 お伽いしぶみ



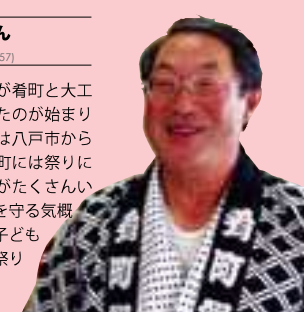
肴町 - Sakanamachi -

許可番号 877

川口馨さん

Kawaguchi Kaoru (57)

大正時代にできた和合組が肴町と大工町に分かれて山車を出したのが始まりと言われています。現在は八戸市から山車を借りています。肴町には祭りに対して熱い思いを持つ人がたくさんいます。だからこそ、伝統を守る気概が引き継がれています。子どもから老人まで、みんなが祭りを楽しんでいます。



倉き狼チンギス・ハーン



中村清一さん

Nakamura Seiichi (55)

三本木は昭和 61 年から山車を下田まつりに参加させました。最初は藤ヶ森から借りていましたが、平成 3 年には山車を自作しました。わたしたちは子どものころ、山車の上で太鼓をたたくことができませんでした。子どもたちの夢をかなえたいという強い思いで、山車を作り続けています。これからも地域の力を結集し頑張ります。



三本木 - Sanbongi -

許可番号 859 七福神・おいらせ港まつり



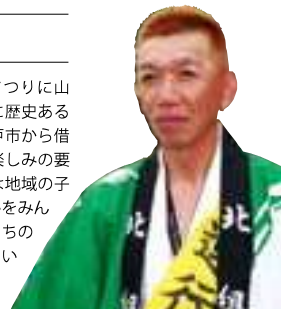
北組 - Kitagumi -

許可番号 873 輪廻転生・小栗判官と照手姫

橘一成さん

Tachibana Kazunori (49)

北組は明治 22 年から百石まつりに山車を参加させている、非常に歴史ある山車組です。現在山車は八戸市から借りています。以前は大人の楽しみの要素が強かったですが、最近では地域の子どものため、という思いをみんなが持っています。子どもたちの笑顔は、何ものにも代えがたい宝物ですね。



中村信一さん

Nakamura Shinichi (56)

三田南組は、三田祭り時代から山車を参加させています。近年は地域の子どもの数が減少してきていますが、ほかの地域からの子どもたちがたくさん参加してくれるのは大変ありがたいことです。今年も若い人とベテランの力を合わせて、満足のいく山車を作ることができました。長い歴史を絶やさないよう、頑張っていきます。



三田南組 - Mita-Minamigumi -

許可番号 858 石川五右衛門・釜茹での刑



七軒町 - Shichigencho -

許可番号 872 前田慶次見参

福岡義忠さん

Fukuoka Yoshitada (56)

七軒町は大正時代から百石まつりに参加しています。一時中断した時代もありますが、復活しています。現在、山車は八戸市から借りています。地域の子どもの数は少なくなりましたが、みんな友達を誘いながら、まつりを盛り上げています。これからも力の続く限り、力を合わせていきたいと考えています。



村崎秀男さん

Murasaki Hideo (54)

三田北組は、三田祭り時代から山車を参加させている、歴史の長い山車組です。本年はお盆過ぎころから本格的に山車を作り始めました。若い人が役割と責任を持って、しっかりと山車作りをしてくれました。本当に助かっています。先人から引き継いだ伝統を、これからもしっかりと守っていききたいと考えています。



三田北組 - Mita-Kitagumi -

許可番号 857 金太郎伝説



藤ヶ森 - Fujigamori -

許可番号 871 豊臣秀吉・小田原城出陣

藤ヶ森利昭さん

Fujigamori Toshiaki (61)

藤ヶ森は昭和 44 年に初めて山車を百石まつりに参加させました。最初は八戸市から山車を借りていました。しかし 30 年ほど前から、山車の自作を始めました。地域の人々の技術、若い力が強い団結力で結ばれています。将来を担う子どもたちの夢のため、山車作りをこれからも続けていきます。



坂井田昇さん

Sakaida Noboru (44)

間木は平成 17 年に山車を下田まつりに参加させました。地域の子どもたちに祭りの楽しさを味わってほしいという強い思いが、地域の人々の心に根付いています。間木地区の子どもだけでなく、学区の違う木ノ下地区からの参加者もいて、非常に心強く思います。3 年連続最優秀賞をいただき、大変光栄に思っています。



間木 - Magi -

許可番号 860 忍術合戦・児雷也



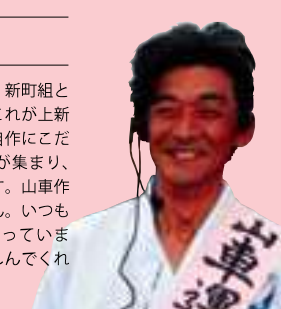
上新町 - Kamishincho

許可番号 870 天女のはごろも

福岡晃さん

Fukuoka Akira (45)

大正時代にあった新道組は、新町組と上新町組に分かれました。これが上新町組の始まりです。山車は自作にこだわっています。地域の人々が集まり、楽しみながら山車を作ります。山車作りに完璧なものはありません。いつも試行錯誤しながら山車を作っています。子どもたちが笑顔で楽しんでいるのが、何よりの喜びです。





4



2



1

あふれる笑顔 深まるきずな

祭りに参加するのは、神事にかかわるものだけではない。老若男女、さまざまな人々が祭りを盛り上げている。祭りは笑顔をもたらし、人同士のつながりを深める。喜びを共感できるからこそ、祭りは人々を魅了する。

4 百石まつりに毎年姿を見せる日ヶ久保の虎舞。子どもたちは恐ろしさのあまり泣き出すこともしばしば 5 三田南組恒例の「OB太鼓」。若かりしころの勇ましい姿を、若者や子どもに披露する 6 下田まつり仮装に参加した中村貴子さん=三本木=。昭和の名曲「岸壁の母」をモチーフに、シベリア抑留から帰る息子を待ちわびる姿を演じた。迫真の演技に涙を流す老人もいた 7 三田北組はテントで反省会。山車作りは地域の人々を強く結びつける

中学生たちのしつかりとした口つきと振る舞い。何百年も前から、絶えることなく引き継がれた伝統芸能を、将来へつなげてくれる頼もしい子どもたちだ。祭りをを行うためには、何カ月も前から準備を進めていなければならぬ。仕事ではなく、地域の活動として、自主的にかかわっていかねければならない。地域を愛する者たち、祭りを大切に思う者たちの思いは、一致団結したものに結晶化する。こうして祭りに熱い思いを持ってかわる人々の姿は、まぶしいほどに美しく、崇高なものに感じられてくる。かわる者だけでなく、祭りを見る者にも、その重みは伝わってくる。楽しさや喜びを、みんなで共感することができるのだ。祭りの余韻を残しながら、おいらせの短い夏は終わりを告げていく。

百石まつりは神事とのかかわり、下田まつりは地域の仮装行列からと、それぞれの祭りの始まりには違いがある。それでも変わらないのは、仲間と共に祭りの準備に汗を流し、喜びを共に分かち合えることだ。近年の祭りは、地域の人々の「楽しみ」、地域の「観光」としての要素が加わった。地域のみんなが、祭りの時期を待ち遠しく思うようになってくる。保育園や幼稚園などの施設は、小さな子どもたちを祭りのパレードに参加させるところが非常に多い。保育、教育活動の一環として、祭りの歴史や伝統に直接触れることができる。保護者たちはビデオカメラなどを手にしながら、かわいい子どもたちの晴れ舞台を一心に見つめる。地域の伝統芸能に間近に触れることができるのも、祭りの大きな魅力だ。日ヶ久保の虎舞や木村の鶏舞など、古くから伝わる芸能を楽しみにしている人も多い。伝統芸能は後継者が次第に少なくなってきたといわれている。それでもなお、しっかりと引き継いでくれる若者がいるのは心強い。小学生たちのかわいらしくもたくましい姿、



7



6



5



3

1 若宮八幡宮の行列は神事にちなんだものが多い。てんぐの面をかぶった狼田彦命と中学生たち(百石まつり) 2 祭りには保育園児も出演する。伝統的な駒踊りを披露する深沢保育園の園児たち(百石まつり) 3 今年の百石まつりには、千葉学園高校バントフリング部も参加。華麗な演技で観客を魅了した

暑い夏もお盆を過ぎてくると、おいらせの朝夕の気温はぐっと下がってくる。そんなころ、町の至るところから子どもたちの元気なおはやしの音色が、心地よく響いてくる。

同時に山車組の作業は忙しい毎日を迎えるようになる。男たちは仕事帰りの疲れた体で、山車作りに力を注ぐ。時には友と酒を酌み交わしながら「今年の山車はこうやって飾ろう」、「子どもたちに楽しんでもらおう」と話に花が咲く。女たちは料理を作ったり、子どもの衣装などを準備したりして祭りを支える。祭りはコミュニティの結束を強める大きなきっかけにつながっている。

山車運行を迎える当日、山車組たちの熱い思いは一気に花開く。祭りを迎えるまでに重ねた苦労や疲れを忘れ、ひたすら祭りを楽しむ。遠い昔から、変わらぬ姿がそこにある。

近年、少子化を迎えて子どもたちが少なくなった一多くの山車組が実感している現実だ。昔の山車組の写真を見ると「これほどまで子どもが多かったのか」と驚く。最近のひとつの地域だけでなく、友達伝いで幅広い地域から子どもたちが山車組に参加するようになっている。今後の祭りのスタイルとして、主流になっていくのではないだろうか。

祭りは神事と切っても切れない、深いかわりを持つ。山や野で農作物、海で海産物を得ながら、昔の人々は命をつないできた。豊作豊漁を祈り、感謝する精神が祭りの原点である。「陸の神様、今年も米が豊作でありますように」、「海の神様、来年もよろしくお願いします」—そんな気持ちが込められている。歴史と伝統を意識して祭りにかかわることで、祭りをさらに楽しむことができるはずだ。

百石まつりは9月19日から3日間、下田まつりは9月26日から2日間にわたり開かれた。どちらも秋らしく、すがすがしい快晴に恵まれた。山車組の多くはそのことにも感謝しながら、来年の祭りの構想を練り始めている。来年の祭りも晴れることを祈って、祭りへ参加してみよう。おいらせの歴史と伝統、熱い思いを五感で感じ取るために。

特集 秋祭り —豊作豊漁を神に祈る—
おわり

参考文献 下田町誌、百石町誌、北奥日新聞（北
向印刷所発行）、青い森青い風 2005 年 9・10 月号（日
本原燃株式会社発行）、「下田まつり」生き人形の生い
立ちと類似事例（櫻庭俊美）

山車の上で太鼓をたたく小向穰羽くん（2つ）の姿に、
祖父の意郎さん＝（55）七軒町＝はにっこり笑顔

豊作豊漁を神に祈る。祭りの精神は子や孫へと引き継がれていく。